

IBM WebSphere Commerce - Express



追加ソフトウェア・ガイド

バージョン 5.5

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、特記事項に記載されている情報をお読みください。

本書の内容は、IBM WebSphere Commerce - Express バージョン 5.5、および新版で特に指定のない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。製品のレベルにあった版を使用していることをご確認ください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Commerce - Express
Additional Software Guide
Version 5.5

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2003.10

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1996, 2003. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2003

本書について

本書の内容

本書は、WebSphere® Commerce - Express に装備されている追加ソフトウェア・コンポーネントの構成方法に関する情報を記載しています。WebSphere MQ と共に稼働するように WebSphere Commerce - Express を構成する方法についての情報も提供しています。WebSphere MQ は WebSphere Commerce には付属していないので、別途購入する必要があります。

このガイドの対象読者は、システム管理者と、インストール・タスクおよび構成タスクを担当するその他全員です。

本書の更新内容

製品の最新変更に関する詳細は、WebSphere Commerce CD 1 のルート・ディレクトリーにある README ファイルを参照してください。さらに、本書のコピー、および本書の更新バージョンは、以下の WebSphere Commerce Technical Library から PDF ファイルとして入手できます。

<http://www.ibm.com/software/commerce/library/>

また、本書の更新バージョンは、以下の Web サイトにある WebSphere Developer Domain の WebSphere Commerce Zone にも掲載されています。

<http://www.ibm.com/software/wsdd/zones/commerce/>

本書で使用している規則と用語

本書では、強調表示に対して次のような規則が定められています。

太文字	コマンドを示すか、またはフィールド、アイコン、またはメニュー選択項目の名前のようなグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) コントロールを示します。
モノスペース (Monospace)	書かれているとおりに入力するテキスト例と、ファイル名、およびディレクトリー・パスとその名前を示します。
イタリック	言葉を強調する際に使用されます。さらに、ご使用のシステムで適切な値に置換する必要のある名前を示しています。



このアイコンはヒントのマークであり、タスクの実行に役立つ追加情報が示されます。

重要

これは、特に重要な情報を強調表示した項です。

注意

これは、データの保護を目的とした情報を強調表示する項です。

-  OS/400® で実行するプログラムに特有の情報を示します。
-  Linux で実行するプログラムに特有の情報を示します。
-  Windows® で実行するプログラムに特有の情報を示します。
-  DB2 Universal Database™ に特有の情報を示します。

パス変数

本書では、ディレクトリー・パスを表すのに次のような変数を使用しています。

WC_installdir

これは、WebSphere Commerce のインストール・ディレクトリーです。以下は、各種オペレーティング・システム上の WebSphere Commerce のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

-  /QIBM/ProdData/CommerceServer55
-  /opt/WebSphere/CommerceServer55
-  C:¥Program Files¥WebSphere¥CommerceServer55

WC_userdir

これは、ユーザーによる構成のために変更可能または必要とされる、WebSphere Commerce が使用するすべてのデータ用のディレクトリーです。こうしたデータの例としては、WebSphere Commerce インスタンス情報があります。このディレクトリーは、OS/400 で固有です。

WC_userdir 変数は、次のディレクトリーを表しています。

/QIBM/UserData/CommerceServer55

WAS_installdir

これは、WebSphere Application Server のインストール・ディレクトリーです。以下は、各種オペレーティング・システム上の WebSphere Application Server のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

-  /QIBM/ProdData/WebAS5
-  /opt/WebSphere/AppServer

必要な知識

このガイドの対象読者は、システム管理者と、WebSphere Commerce 上でインストール・タスクおよび構成タスクを担う他の全担当者です。

WebSphere Commerce のインストールおよび構成を担当するストア開発者またはシステム管理者は、以下の分野の知識をもっていなければなりません。

- ご使用のオペレーティング・システム
- インターネット
- IBM® DB2®
- WebSphere Application Server の管理コンソール
- オペレーティング・システムの基本コマンド
- 基本の SQL コマンド

目次

本書について	iii
本書の内容	iii
本書の更新内容	iii
本書で使用している規則と用語	iii
パス変数	iv
必要な知識	v

第 1 部 概要 1

第 2 部 WebSphere Commerce - Express 分析ツール 3

第 1 章 IBM WebSphere Commerce Analyzer 5

IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストール	5
WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成	6
WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成	6
WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成	8
データのキャプチャーのための WebSphere Commerce の構成	10

第 3 部 WebSphere Commerce - Express ビジネス・インテグレーション・アダプター 13

第 2 章 WebSphere MQ 15

WebSphere MQ のインストール	16
MQ_INSTALL_ROOT 環境変数の確認	17
WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成	17
WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成	19
JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別	20
WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成	21
WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の作成	23
WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成	25
ご使用の WebSphere MQ 構成のテスト	26
追加の WebSphere MQ 資料	26

第 4 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce - Express . 29

第 3 章 WebSphere Commerce で使用するためのディレクトリー・サーバーの構成 31

WebSphere Commerce で使用するための IBM Directory Server の構成	31
WebSphere Commerce で使用するための IBM OS/400 Directory Services の構成	32
IBM OS/400 Directory Services への接尾部の追加	32
ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーの作成	33
次のステップ	34

第 4 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成 35

WebSphere Commerce 構成マネージャーにおける LDAP の使用可能化	35
WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの使用可能化	36
LDAP での WebSphere Commerce Payments の使用可能化	36
WebSphere Commerce での LDAP のテスト	37

第 5 章 WebSphere Commerce で LDAP を使用不可にする 39

第 5 部 追加の WebSphere Application Server コンポーネント . 41

第 6 章 WebSphere Studio Application Server Toolkit 43

WebSphere Commerce 症状データベース	43
---------------------------------------	----

第 6 部 追加ソフトウェア・タスク 45

第 7 章 WebSphere Commerce のタスク 47

WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動	47
Linux での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動	47
OS/400 での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動	49
Windows での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動	50
WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止	51
WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止	51

第 8 章 WebSphere Application Server のタスク	53
アプリケーション・サーバーの始動および停止	53
Linux でのアプリケーション・サーバーの始動または停止	53
OS/400 でのアプリケーション・サーバーの始動および停止	54
Windows でのアプリケーション・サーバーの始動および停止	55
WebSphere Application Server 管理コンソールの始動	56
OS/400 WebSphere Application Server サブシステムの始動	56

第 7 部 付録 59

付録. 詳細情報の入手方法	61
WebSphere Commerce の情報	61
WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ	61
WebSphere Commerce Technical Library	61
WebSphere Application Server	61
WebSphere Application Server Network Deployment	61
WebSphere Application Server Edge Component	62
その他の IBM 資料	62
特記事項	63
商標	64

第 1 部 概要

WebSphere Commerce には、WebSphere Commerce と共に使用できるオプションのソフトウェア・パッケージがいくつか組み込まれています。それらのパッケージのインストールと構成の手順の詳細は、以下に示す項を参照してください。

- 3 ページの『第 2 部 WebSphere Commerce - Express 分析ツール』
- 13 ページの『第 3 部 WebSphere Commerce - Express ビジネス・インテグレーション・アダプター』
- 29 ページの『第 4 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce - Express』
- 41 ページの『第 5 部 追加の WebSphere Application Server コンポーネント』

これらの製品は、WebSphere Commerce インスタンスの作成の前または後でインストールできます。

第 2 部 WebSphere Commerce - Express 分析ツール

WebSphere Commerce - Express には、WebSphere Commerce - Express を操作するにあたりさまざまな面を分析できる強力なツールが備えられています。こうしたツールの詳細については、以下の章を参照してください。

- 5 ページの『第 1 章 IBM WebSphere Commerce Analyzer』

第 1 章 IBM WebSphere Commerce Analyzer

IBM WebSphere Commerce Analyzer は、オプションでインストール可能な WebSphere Commerce のフィーチャーです。WebSphere Commerce Analyzer は、WebSphere Commerce を使用して作成したオンライン・ストアに関する事前定義のビジネス・レポートを生成します。ビジネス・レポートは、マーケティングの販売促進の効果と商品販売に関する情報を提供します。マーケティング・マネージャーは、WebSphere Commerce アクセラレーターからビジネス・レポートにアクセスできます。ビジネス・レポートに加え、WebSphere Commerce Analyzer はヒストリカル・データにデータ・マイニングを実行して、オンライン・ショッパーの傾向および特性を識別し、そのデータを WebSphere Commerce システムにカスタマー・プロフィールとしてフィードバックすることができます。

インストールおよび構成の際に、WebSphere Commerce Analyzer はデータベースに基づくデータマートおよび制御データベースを WebSphere Commerce Analyzer サーバー上に作成します。これらのデータベースは、ビジネス・レポートの生成に必要な情報を格納するために使用されます。

WebSphere Commerce Analyzer データマートは Windows 上の DB2 Universal Database 形式ですが、任意の WebSphere Commerce データベースからデータを抽出できます。データを @server[®] iSeries[™] の WebSphere Commerce データベースから抽出する場合、DB2 DataPropagator[™] for iSeries バージョン 8.1 (5722DP4) を購入する必要があります。@server iSeries からの抽出のセットアップに関する詳細については、「WebSphere Commerce Analyzer インストールと構成ガイド」を参照してください。

WebSphere Commerce データベースが Oracle9i である場合、Oracle データベースに対して DB2 レプリケーションの実行を可能にする、DB2 Information Integrator を購入することが必要です。

IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストール

WebSphere Commerce で WebSphere Commerce Analyzer を使用するには、次のようにします。

1. IBM WebSphere Commerce Analyzer をインストールして構成します。詳細は、6 ページの『WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成』を参照してください。

400 必要なすべてのフィックスがインストールされているか確認してください。特に、iSeries の WebSphere Commerce から複製する場合、必ず APAR II13348 を読んで、最新のすべてのフィックスを 5722DP4 のインストールに適用しなければなりません。

2. **400** WebSphere Commerce Analyzer マシンで、DB2 Universal Database コマンド行から以下のコマンドを発行します。

```
db2jstrt port_number
```

ここで、*port_number* は、 8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』のステップ17 (10 ページ)で使用されているポート番号です。

3. WebSphere Commerce を実行しているオペレーティング・システムに応じて、次のようにします。
 -   WebSphere Commerce マシン上に、WebSphere Commerce Analyzer の新規データ・ソースを作成します。詳細は、『WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成』を参照してください。
 -  WebSphere Commerce マシン上に、WebSphere Commerce Analyzer 用の新しい JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースを作成します。詳細は、8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』を参照してください。
4. データをキャプチャーするように WebSphere Commerce を構成します。詳細は、10 ページの『データのキャプチャーのための WebSphere Commerce の構成』を参照してください。
5. WebSphere Commerce を始動します。詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成

IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストールと構成の詳細は、「*WebSphere Commerce Analyzer* インストールと構成ガイド」を参照してください。「*WebSphere Commerce Analyzer* インストールと構成ガイド」は、install.pdf という名前の PDF ファイルとして用意されており、IBM WebSphere Commerce Analyzer CD 中の *locale* ディレクトリに置かれています (ただし *locale* は、ご使用のマシンが使用する言語環境のロケール・コードであり、たとえば米国英語のロケールは en_US です)。

WebSphere Commerce Analyzer は Linux 上では稼働しません。Linux 上で稼働する WebSphere Commerce と共に WebSphere Commerce Analyzer を使用するには、WebSphere Commerce Analyzer を、Windows を実行するマシン上にインストールします。

重要

WebSphere Commerce と WebSphere Commerce Analyzer とではソフトウェア要件が異なり、パフォーマンスの問題もあるため、WebSphere Commerce と WebSphere Commerce Analyzer はそれぞれ異なるマシン上にインストールする必要があります。

WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成

このセクションの説明は、OS/400 で実行している WebSphere Commerce には適用されません。OS/400 で実行している WebSphere Commerce の場合、8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』の説明に従ってください。

この項のステップを完了する前に、 WebSphere Commerce マシンから WebSphere Commerce Analyzer データマートへのリモート・データベース接続を作成する必要があります。リモート・データベース接続を作成するには、 WebSphere Commerce マシンに DB2 Administration Client がインストールされていなければなりません。DB2 Configuration Assistant を使って WebSphere Commerce Analyzer データマートへのリモート・データベース接続を作成するには、次のようにします。

1. Configuration Assistant をオープンします。
2. データベース接続のリスト上で右マウス・ボタン・クリックして、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard)」を選択します。
3. 「ネットワークを検索 (Search the Network)」を選択して、「次へ」をクリックします。
4. 「システムを追加 (Add System)」をクリックして、 WebSphere Commerce Analyzer データマートが存在するマシンの情報を入力します。
5. WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベースが見つかるまで、ツリーを展開します。そのデータベースを選択してから、「終了」をクリックします。

WebSphere Commerce マシン上に WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースを作成するには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、56 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」を選択します。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
5. 以下を行って、 WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「サーバーのブラウズ (Browse Servers)」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「OK」をクリックします。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
 - d. 「適用」をクリックします。
6. JDBC プロバイダーを一覧で示した表で、「`instance_name - WebSphere Commerce JDBC プロバイダー`」をクリックします。ここで、`instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

「`instance_name - WebSphere Commerce JDBC プロバイダー`」ページが表示されます。

7. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」をクリックします。「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」ページが表示されます。
8. 「新規」をクリックします。「新規」ページが表示されます。
9. 「一般プロパティ (General Properties)」表の各フィールドで、次のように入力します。

名前 WebSphere Commerce Analyzer データマートの名前を入力します。

説明 データ・ソースの説明 (WebSphere Commerce Analyzer data mart など) を入力します。

データベース名

WebSphere Commerce Analyzer データマートへのリモート・データベース接続の名前を入力します。

デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)

リモート・データベース接続へのアクセスに使用するユーザー ID を入力します。

デフォルト・パスワード (Default Password)

「デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)」のパスワードを入力します。

10. 「OK」をクリックします。
11. タスクバーの「保管」をクリックします。「保管」ページがオープンします。
12. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
13. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
14. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成

このセクションの命令は、OS/400 で実行している WebSphere Commerce にのみ適用されます。他のオペレーティング・システムで実行されている WebSphere Commerce の場合には、6 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成』の説明に従ってください。

WebSphere Commerce ノードで WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーを作成するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce Analyzer に使用される DB2 インストールから @server iSeries マシンの以下のディレクトリーに db2java.zip ファイルをコピーします。

```
WC_userdir/instances/instance_name/conf
```

ここで、*instance_name* は、WebSphere Commerce Analyzer を使用可能にしている対象の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

WC_userdir のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

2. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
3. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、56 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
4. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
5. ナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「**JDBC プロバイダー (JDBC Providers)**」を選択します。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
6. 以下を行って、 WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「**サーバーのブラウズ (Browse Servers)**」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「**OK**」をクリックします。「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページが表示されます。
 - d. 「**適用**」をクリックします。
7. 「JDBC プロバイダー (JDBC Providers)」ページで、「**新規**」をクリックします。「新規 JDBC プロバイダー (New JDBC Provider)」ウィザードを開始します。
8. 「**JDBC プロバイダー (JDBC Providers)**」フィールドから「**DB2 JDBC プロバイダー (DB2 JDBC Provider)**」を選択し、「**OK**」をクリックします。「DB2 JDBC プロバイダー (DB2 JDBC Provider)」ページが表示されます。
9. 「**クラスパス (Classpath)**」フィールドに、すでに @server iSeries マシンにコピーしてある `db2java.zip` ファイルへの完全パスを入力します。パスは、次のようにしてください。

`WC_userdir/instances/instance_name/conf/db2java.zip`

ここで、`instance_name` は、 WebSphere Commerce Analyzer を使用可能にしている対象の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

`WC_userdir` のデフォルト値は、 iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

10. 「**適用**」をクリックします。「DB2 JDBC プロバイダー (DB2 JDBC Provider)」ページが最新表示されます。
11. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))**」をクリックします。「データ・ソース (バージョン 4) (Data Sources (Version 4))」ページが表示されます。
12. 「**新規**」をクリックします。「新規」ページが表示されます。
13. 「一般プロパティ (General Properties)」表の各フィールドで、次のように入力します。

名前 WebSphere Commerce Analyzer データマートの名前を入力します。

説明 データ・ソースの説明 (WebSphere Commerce Analyzer data mart など) を入力します。

データベース名

WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベースの名前を入力します。

デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)

WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベース接続へのアクセスに使用するユーザー ID を入力します。

デフォルト・パスワード (Default Password)

「デフォルト・ユーザー ID (Default User ID)」のパスワードを入力します。

14. 「適用」をクリックします。ページが最新表示されます。
15. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「カスタム・プロパティ」をクリックします。「カスタム・プロパティ」ページが表示されます。
16. 「カスタム・プロパティ」ページで、「portNumber」をクリックします。「portNumber」ページが表示されます。
17. 「portNumber」ページの「値」フィールドに、5 ページの『IBM WebSphere Commerce Analyzer のインストール』のステップ 2(5 ページ) で db2jstrt コマンドを発行する際に指定したポート番号を入力します。
18. 「OK」をクリックします。「カスタム・プロパティ」ページが表示されます。
19. 「カスタム・プロパティ」ページで、「新規」をクリックします。「新規」ページが表示されます。
20. 「新規」ページで、次のように各フィールドを完成させます。

名前 次の値を入力します。

serverName

値 WebSphere Commerce Analyzer データマート・データベース・ノードの完全修飾 TCP/IP ホスト名を入力します。

21. 「OK」をクリックします。
22. タスクバーの「保管」をクリックします。「保管」ページがオープンします。
23. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
24. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
25. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

データのキャプチャーのための WebSphere Commerce の構成

ユーザー・トラフィックが開始する前に、WebSphere Commerce 構成マネージャー内の **UserTrafficEventListener**、**CampaignRecommendationStatisticsListener** および **CampaignRecommendationListener** コンポーネントを使用可能にしなければなりません。これらのコンポーネントが使用可能になっていない場合、ビジネス・レポートによってはデータが示されないことになります。

データのキャプチャーのために WebSphere Commerce を構成するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動の詳細は、 47 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
2. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ご自分のホスト名 (*your host name*)」 → 「商取引 (**Commerce**)」を展開します。
4. 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「コンポーネント」を展開します。
5. 「**CampaignRecommendationListener**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「コンポーネント使用可能」が選択されていることを確認します。
 - b. 「拡張」タブをクリックします。
 - c. 「スタート」が選択されていることを確認します。
 - d. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
6. 「**UserTrafficEventListener**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「コンポーネント使用可能」が選択されていることを確認します。
 - b. 「拡張」タブをクリックします。
 - c. 「スタート」が選択されていることを確認します。
 - d. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
7. 「**CampaignRecommendationStatisticsListener**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「コンポーネント使用可能」が選択されていることを確認します。
 - b. 「拡張」タブをクリックします。
 - c. 「スタート」が選択されていることを確認します。
 - d. 「適用」をクリックして、変更を受諾します。
8. 「コンポーネント」を縮小表示します。
9. 「**Commerce アクセラレーター**」を選択してから、次のようにします。
 - a. 「**WebSphere Commerce Analyzer はインストール済みか (Is WebSphere Commerce Analyzer installed?)**」では、「はい」を選択します。
 - b. 「レポート文書ルート (**Reports Document Root**)」フィールドに、WebSphere Commerce Analyzer が生成するレポートを保存するパスを入力します。このフィールドに入力するパスは、WebSphere Commerce インスタンスのルート・パスの最後に追加されます。
デフォルト・パスは次のようになっています。

▶ 400 *WC_userdir/instances/instance_name/WCA/reports*

▶ Linux *WC_installdir/instances/instance_name/WCA/reports*

▶ Windows

`WC_installdir¥instances¥instance_name¥WCA¥reports`

ただし `instance_name` は、WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

`WC_installdir` および `WC_userdir` のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

- c. 「**WCA DataSource**」フィールドには、WebSphere Commerce を実行しているオペレーティング・システムに応じて次のいずれかを実行します。
 - ▶ Linux ▶ Windows 6 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用のデータ・ソースの作成』のステップ 9 (8 ページ) で入力した、WebSphere Commerce Analyzer データ・ソースの名前を入力します。
 - ▶ 400 8 ページの『WebSphere Commerce Analyzer 用の JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースの作成』のステップ 13 (9 ページ) で入力した、WebSphere Commerce Analyzer データ・ソースの名前を入力します。
 - d. 「**適用**」をクリックして、変更を受諾します。
10. 構成マネージャーを終了します。

第 3 部 WebSphere Commerce - Express ビジネス・インテグレーション・アダプター

以下のソフトウェアを使って、WebSphere Commerce - Express を他のビジネス・プロセスに統合することができます。

- 15 ページの『第 2 章 WebSphere MQ』

こうしたソフトウェア・パッケージは WebSphere Commerce - Express には付属していないので、別途購入する必要があります。第 3 部の各章では、これらの製品と共に稼働するように、WebSphere Commerce - Express で提供されているアダプターを構成する方法について述べています。

重要

その他のビジネス・プロセスと WebSphere Commerce を統合するのに、WebSphere Application Server の組み込みメッセージング・コンポーネントを使用することはできません。組み込みメッセージング・コンポーネントは、WebSphere Commerce が提供するいずれのアダプターによってもサポートされていません。

第 2 章 WebSphere MQ

WebSphere MQ を使ってバックエンド・システムと外部システムを WebSphere Commerce に統合するために、WebSphere Commerce には、インバウンド要求用の WebSphere MQ (以前は MQSeries[®] と呼ばれていた) のリスナー、アウトバウンド要求用の WebSphere MQ のアダプターが用意されています。

Linux WebSphere MQ on Linux は WebSphere Commerce ではサポートされていません。ただし、Windows 上で実行する WebSphere MQ は、Linux 上で実行する WebSphere Commerce と共に使用することができます。

このリスナーは、WebSphere MQ バージョン 5.3 以上をサポートします。WebSphere MQ バージョン 5.3 には、Java[™] Message Service (JMS) 用の MQSeries クラスと Java 用の MQSeries クラスが組み込まれています。

対応する物理的な WebSphere MQ オブジェクトにマップされる JMS キュー接続ファクトリーと JMS キューを作成する必要があります。それを作成すれば、WebSphere Commerce リスナーは JMS を介して WebSphere MQ エンティティーにアクセスできるようになります。

WebSphere Commerce と WebSphere MQ 間の接続を 2 つの接続モードのいずれかでセットアップできます。

バインディング・モード

WebSphere Commerce は、WebSphere MQ と同じマシンにインストールしますが、Java Messaging Server (JMS) API を使用する Java 用の MQSeries クラスを介して WebSphere MQ に接続します。通信は TCP/IP 接続ではなくプロセス間バインディング接続を介して行われるので、バインディング・モードはクライアント・モードよりもパフォーマンスが良い可能性があります。

クライアント・モード

WebSphere Commerce および WebSphere MQ は、TCP/IP を使用して接続します。WebSphere Commerce が 1 台のマシンにインストールされ、WebSphere MQ が別のマシンにインストールされている場合には、このモードを使用する必要があります。このモードでは、WebSphere MQ クライアントは WebSphere Commerce マシン上にインストールすることが求められています。

重要

WebSphere Application Server 組み込みメッセージング・コンポーネントは、WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce アダプターによってはサポートされていません。

WebSphere Commerce で WebSphere MQ を使用するには、次のようにします。

1. 必要であれば、WebSphere MQ の資料に述べられている解説に従って WebSphere MQ をインストールします。どの WebSphere MQ 資料を参考にするかに関する詳細は、『WebSphere MQ のインストール』に記載されています。WebSphere MQ のインストール時には、必ず Java メッセージング・コンポーネントもインストールしてください。
2. 既存の WebSphere MQ オブジェクトを示すか、または WebSphere Commerce と WebSphere MQ を併用するのに必要となる新しい WebSphere MQ オブジェクトを作成します。WebSphere MQ オブジェクトの作成方法は、17 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』に記載されています。
3. JMS キュー接続ファクトリーと JMS キューを作成します。JMS キュー接続ファクトリーと JMS キューの作成方法は、19 ページの『WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成』に記載されています。
4. WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce リスナーを使用可能にします。WebSphere MQ 用のリスナーを使用可能化する方法は、25 ページの『WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成』に記載されています。

WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce リスナーと WebSphere Commerce メッセージング・システムの詳細は、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプを参照してください。

WebSphere MQ のインストール

下記の資料に記載されている方法に従って WebSphere MQ をインストールします。その際、必ず WebSphere MQ の Java メッセージング・コンポーネントもインストールしてください。

400

「*WebSphere MQ for iSeries* スタートアップ・ガイド バージョン 5.3」

Windows

「*WebSphere MQ for Windows* スタートアップ・ガイド バージョン 5.3」

これらの資料は以下の Web サイトに掲載されています。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/library/manualsa/manuals/platspecific.html>

URL は、紙面の都合上 2 行に分けて書いてありますが、1 行で入力してください。

重要

WebSphere MQ では、マシン名中にスペースを使用することはできません。スペースが使われているマシン名の付いたマシンに WebSphere MQ をインストールすると、キュー・マネージャーは作成できません。

MQ_INSTALL_ROOT 環境変数の確認

WebSphere MQ クライアントまたはサーバーを WebSphere Commerce と同じノード上にインストールする場合には、MQ_INSTALL_ROOT 環境変数が適切な場所を指していることを確認してください。

MQ_INSTALL_ROOT 環境変数の値をチェックするには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、56 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. ナビゲーション・ツリーで、「環境 (Environment)」を展開し、「WebSphere 変数の管理 (Manage WebSphere Variables)」を選択します。「WebSphere 変数 (WebSphere variables)」ページが表示されます。
5. MQ_INSTALL_ROOT の値が正しいことを確認します。
MQ_INSTALL_ROOT 変数は、WebSphere Commerce マシン上の WebSphere MQ インストール・ディレクトリーを指しているはずですが、
値が正しくない場合には、次のようにして変更します。
 - a. 「MQ_INSTALL_ROOT」をクリックします。
 - b. 「値」フィールドに、正しいパスを入力します。
 - c. 「OK」をクリックします。
 - d. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
 - e. 「保管」ページで、「ノードとの変更の同期化 (Synchronize changes with node)」を選択します。
 - f. 「保管」ページの「保管」をクリックします。
6. WebSphere Application Server 管理コンソールを終了します。
7. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成

WebSphere Commerce では、WebSphere Commerce を WebSphere MQ と共に稼働させるために、WebSphere MQ で情報のセットを定義する必要があります。これらには、キュー・マネージャーやキューのセットが含まれます。

WebSphere Commerce と共に稼働するように WebSphere MQ を構成するには、次のようにします。

1.  WebSphere Commerce を始動するために使用する Windows ユーザー ID を mqm グループに追加します。

- WebSphere Commerce が使用するキュー・マネージャーを識別します。これは、既存のキュー・マネージャーか、新たに作成したキュー・マネージャーにできます。キュー・マネージャーの選択は、統合構成によって決まります。

キュー・マネージャーの作成の詳細は、WebSphere MQ の資料を参照してください。WebSphere MQ の資料に関する情報については、26 ページの『追加の WebSphere MQ 資料』で提供されています。

この章の解説では、キュー・マネージャー名は *hostname.qm* であると想定されています。ただし *hostname* は、WebSphere MQ を実行するマシンのホスト名 (ドメインは含まない) です。

キュー・マネージャー・リスナーで使用されるキュー・マネージャー名とポート番号をメモしておいてください。この情報は、後のステップで使います。

重要

WebSphere Commerce を始動するために使用するオペレーティング・システムのユーザー ID が、キュー・マネージャーに対しても許可を与えられていることを確認してください。WebSphere MQ キュー・マネージャーに対してユーザー ID を許可するための手順については、WebSphere MQ の資料を参照してください。

さらに、キュー・マネージャー名には大文字小文字の区別があります。キュー・マネージャー名の大文字小文字が後のステップで正しく使用されるようにします。

- キュー・マネージャーのローカル・メッセージ・キューを識別します。これらは既存のメッセージ・キューか、新たに作成したキューにできます。

キューの作成の詳細は、WebSphere MQ の資料を参照してください。

WebSphere MQ の資料に関する情報については、26 ページの『追加の WebSphere MQ 資料』で提供されています。

この章の解説では、以下のローカル・メッセージ・キューを作成することを想定しています。

キュー	説明
<i>hostname.error</i>	デフォルト・エラー・キュー。エラーのインバウンド・メッセージを収集します。
<i>hostname.inbound</i>	WebSphere MQ 用のアダプターの SendReceiveImmediate モードによって使用されます。ここに、バックエンド・システムからの返答および応答メッセージが送られます。WebSphere Commerce はバックエンド・システムへの発信要求に基づいて、返答および応答メッセージを選び出すこともできます。
<i>hostname.inboundp</i>	このキューに到着するメッセージは、並列に処理されます。
<i>hostname.inbounds</i>	このキューに到着するメッセージは、先入れ先出し法に基づいて順次処理されます。

キュー	説明
<code>hostname.outbound</code>	WebSphere Commerce が開始したアウトバウンド・メッセージおよび WebSphere Commerce からの応答メッセージに使用されます。

ただし `hostname` は、WebSphere MQ を実行するマシンの TCP/IP 名です。

識別または作成したメッセージ・キューの名前をメモしておいてください。この情報は、後のステップで使います。

重要

WebSphere Commerce を始動するために使用するオペレーティング・システムのユーザー ID が、メッセージ・キューに対しても許可を与えられていることを確認してください。WebSphere MQ メッセージ・キューに対してユーザー ID を許可するための手順については、WebSphere MQ の資料を参照してください。

さらに、キュー名には大文字小文字の区別があります。キュー名の大文字小文字が後のステップで正しく使用されるようにします。

注: 定義するキューの数は、WebSphere Commerce が統合されるアプリケーションによって異なります。これら 5 つのキューは、統合に必要な最小限のキューです。

4. (クライアント・モードのみ) 作成したキュー・マネージャー用のリスナー・ポートを作成します。

WebSphere MQ を構成するステップを完了したら、『WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成』の解説に進んでください。

WebSphere MQ で使用するための WebSphere Application Server の構成

WebSphere MQ と共に稼働するように WebSphere Application Server を構成するには、次のようにします。

1. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。
2. WebSphere Application Server の管理コンソールをオープンします。詳細は、56 ページの『WebSphere Application Server 管理コンソールの始動』を参照してください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。
4. JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数を判別します。詳しい説明は、20 ページの『JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別』に述べられています。

5. WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーを作成します。詳しい説明は、21 ページの『WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成』に述べられています。
6. WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先を作成します。詳しい説明は、23 ページの『WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の作成』に述べられています。
7. WebSphere Application Server の管理コンソールを終了します。
8. デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を停止します。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Application Server を構成するステップを完了したら、25 ページの『WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成』の解説に進んでください。

JCA-JMS コネクターの ManagedConnections の最大数の判別

JCA-JMS コネクターの ManagedConnections の最大数を判別するには、WebSphere Commerce マシン上で次のようにします。

1. WebSphere Application Server の管理コンソールのナビゲーション・ツリーで、「**アプリケーション (Applications)**」を展開して、「**企業アプリケーション (Enterprise Applications)**」を選択します。「企業アプリケーション (Enterprise Applications)」ページが表示されます。
2. 企業アプリケーションのリストで、**WC_instance_name** をクリックします。ここで、*instance_name* はご使用の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
3. 「関連アイテム (Related Items)」表で、「**コネクター・モジュール (Connector Modules)**」をクリックします。「関連アイテム (Related Items)」表を参照するには、ページを下にスクロールする必要があるかもしれません。「コネクター・モジュール (Connector Modules)」ページが表示されます。
4. コネクター・モジュールのリストで、「**使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)**」をクリックします。「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページが表示されます。
5. 「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**リソース・アダプター (Resource Adapter)**」をクリックします。「WebSphere MQ」ページに **WC_instance_name.Adapter** が表示されます。ここで、*instance_name* はご使用の WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
6. 「WebSphere MQ」ページの **WC_instance_name.Adapter** の「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**J2C 接続ファクトリー (J2C Connection Factories)**」をクリックします。「J2C 接続ファクトリー (J2C Connection Factories)」ページが表示されます。
7. J2C 接続ファクトリーのリストで、「**使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)**」をクリックします。「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページが表示されます。

8. 「使用可能化 - JCAJMSConnector.rar (Enablement-JCAJMSConnector.rar)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**接続プール (Connection Pool)**」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。「接続プール (Connection Pool)」ページが表示されます。
9. 「**最大接続数**」フィールドの値をメモに取ってください。この値は、『WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成』で必要になります。

重要: JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の値を後で変更する場合には、WebSphere MQ JMS プロバイダーの ManagedConnections の最大数の値も変更する必要があります。

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの作成

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーを作成するには、WebSphere Commerce マシンで次のようにします。

1. WebSphere Application Server の管理コンソールのナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「**WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)**」を選択します。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
2. 以下を行って、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「**サーバーのブラウズ (Browse Servers)**」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから `WC_instance_name` を選択します。この `instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「**OK**」をクリックします。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
 - d. 「**適用**」をクリックします。
3. 「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページの「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「**WebSphere MQ キュー接続ファクトリー (WebSphere MQ Queue Connection Factories)**」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。

「WebSphere MQ キュー接続ファクトリー (WebSphere MQ Queue Connection Factories)」ページが表示されます。
4. 「WebSphere MQ キュー接続ファクトリー (WebSphere MQ Queue Connection Factories)」ページの「**新規**」をクリックします。
5. 各フィールドに次のように入力します。

「名前」

新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの

名前を入力します。この章の解説では、WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの名前は `JMSQueueConnectionFactory` であるとしています。

「JNDI 名 (JNDI Name)」

新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を入力します。この章の解説では、WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー接続ファクトリーの JNDI 名は `JMSQueueConnectionFactory` となっています。

「キュー・マネージャー (Queue Manager)」

17 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で識別または作成したキュー・マネージャーの名前を入力します。`hostname.qm` などの、作成したキュー・マネージャーの名前を入力します。ただし `hostname` は、WebSphere MQ を実行するマシンのホスト名 (ドメインは含まない) です。

「ホスト」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。

クライアント・モード WebSphere MQ を実行するマシンの完全修飾 TCP/IP ホスト名を入力します。

「ポート」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。このフィールドに値が含まれていると、バインディング・モードは正しく機能しません。

クライアント・モード 17 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で作成したキュー・マネージャーのリスナー・ポート番号を入力します。

「トランスポート・タイプ (Transport Type)」

システム構成に基づいたトランスポート・タイプを以下から選択します。

- WebSphere Commerce と WebSphere MQ が同一マシンにインストールされ、バインディング・モードを使用したい場合、**BINDINGS** を選択します。
- WebSphere Commerce マシンに WebSphere MQ がインストールされていて、クライアント・モードを使用したい場合には、**CLIENT** を選択します。

「チャネル (Channel)」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。このフィールドに値が含まれていると、バインディング・モードは正しく機能しません。

クライアント・モード このフィールドは無視します。

「CCSID」

使用している接続モードに応じて、このフィールドを完成させます。

バインディング・モード このフィールドがクリアされていることを確認します。このフィールドに値が含まれていると、バインディング・モードは正しく機能しません。

クライアント・モード これは、WebSphere MQ キュー・マネージャーで使用する Coded Character Set Identifier (CCSID) です。このフィールドには 1208 を入力します。CCSID 1208 は、WebSphere MQ で使用される文字セットである UTF-8 です。

「メッセージ保存 (Message Retention)」

「メッセージ保存の使用可能化 (Enable message retention)」チェック・ボックスのチェックをはずします。

「XA は使用可能化済み (XA Enabled)」

「XA の使用可能化 (Enable XA)」チェック・ボックスのチェックをはずします。

他のフィールドはすべて無視してかまいません。

完了したら、「適用」をクリックします。

6. 「追加プロパティ (Additional Properties)」表で、「接続プール (Connection Pool)」をクリックします。「追加プロパティ (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があるかもしれません。「接続プール (Connection Pool)」ページが表示されます。
7. 「最大接続数」に、20 ページの『JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別』で判別した値よりも大きい値を設定します。たとえば、20 ページの『JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の判別』で値 30 が検出されたのであれば、ここでは値 31 を入力します。

重要: この値は、JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の値よりも必ず大きくなくてはなりません。JCA-JMS コネクタの ManagedConnections の最大数の値を後で変更する場合には、WebSphere MQ JMS プロバイダーの ManagedConnections の最大数の値も変更する必要があります。

8. 「OK」をクリックします。
9. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
10. 「保管」ページの「保管」をクリックします。

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の作成

WebSphere MQ 用の WebSphere Commerce リスナーには、種々の JMS キューが必要です。それらの JMS キューは、17 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で識別または作成した WebSphere MQ メッセージ・キューにマップされます。JMS キューは、WebSphere MQ メッセージ・キュー

ーに次のようにマップされます。

表 1. WebSphere MQ キューに対する JMS キューのマッピング

JMS キュー	WebSphere MQ キュー
JMSErrorQueue	<i>hostname.error</i>
JMSInboundQueue	<i>hostname.inbound</i>
JMSOutboundQueue	<i>hostname.outbound</i>
JMSParallelInboundQueue	<i>hostname.inboundp</i>
JMSSerialInboundQueue	<i>hostname.inbounds</i>

ただし *hostname* は、WebSphere MQ を実行するマシンの TCP/IP 名です。

WebSphere Application Server で WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先を作成すると、JMS キューが作成されます。

表中の JMS キュー名は、WebSphere Commerce で使用されるデフォルト名です。WebSphere Commerce 構成マネージャーを使用して JMS キュー名を変更した場合には、JMS キュー名は新規キュー名と一致するように変更する必要があります。

注: 定義するキューの数は、WebSphere Commerce が統合されるアプリケーションによって異なります。これら 5 つのキューは、統合に必要な最小限のキューです。

重要: キュー名には、大文字小文字の区別があります。キュー名の大文字小文字が正しく使用されるようにします。

WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先を作成するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server の管理コンソールのナビゲーション・ツリー内の「リソース」を展開して、「**WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)**」を選択します。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
2. 以下を行って、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーに対するあらゆる変更を探します。
 - a. 「**サーバーのブラウズ (Browse Servers)**」をクリックします。「サーバーの有効範囲の選択 (Select a Server Scope)」ページが表示されます。
 - b. アプリケーション・サーバーのリストから *WC_instance_name* を選択します。この *instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
 - c. 「**OK**」をクリックします。「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページが表示されます。
 - d. 「**適用**」をクリックします。
3. 「WebSphere MQ JMS プロバイダー (WebSphere MQ JMS Provider)」ページの「追加プロパティー (Additional Properties)」表で、「**WebSphere MQ キュー宛先 (WebSphere MQ Queue Destinations)**」をクリックします。「追加プロパティー (Additional Properties)」表を表示するには、ページを下へスクロールする必要があります。あるかもしれません。

「WebSphere MQ キュー宛先 (WebSphere MQ Queue Destinations)」ページが表示されます。

4. 「WebSphere MQ キュー宛先 (WebSphere MQ Queue Destinations)」 ページで、「新規」をクリックします。
5. 各フィールドに次のように入力します。

「名前」

24 ページの表 1 の JMS キューの列に示されているとおりの、新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の名前を入力します。

「JNDI 名 (JNDI Name)」

新規の WebSphere MQ JMS プロバイダー・キュー宛先の JNDI 名を入力します。「名前」フィールドに入力したものと同一名前を使用します。

「ベース・キュー名 (Base Queue Name)」

WebSphere MQ に定義してあるメッセージ・キューの名前を入力します。このメッセージ・キューは、17 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で定義したものです。

「ベース・キュー・マネージャー名 (Base Queue Manager Name)」

17 ページの『WebSphere Commerce で使用するための WebSphere MQ の構成』で作成したキュー・マネージャーの名前を入力します。

「CCSID」

これは、WebSphere MQ キュー・マネージャーで使用する Coded Character Set Identifier (CCSID) です。このフィールドには 1208 を入力します。CCSID 1208 は、WebSphere MQ で使用される文字セットである UTF-8 です。

「ターゲット・クライアント (Target Client)」

JMSErrorQueue および *JMSOutboundQueue* の場合、「MQ」を選択します。他の JMS キューの場合には、「JMS」を選択してください。

他のフィールドはすべて無視してかまいません。

完了したら「OK」をクリックします。

各 JMS キューごとに、上記のステップを繰り返します。

JMS キューをすべて作成し終わったら、以下を行います。

1. 管理コンソールのタスクバーで「保管」をクリックします。
2. 「保管」ページの「保管」をクリックします。

WebSphere MQ の使用のための WebSphere Commerce の構成

WebSphere MQ を使用するように WebSphere Commerce を構成するには、以下のようにしてトランスポート・アダプターを使用可能にしなければなりません。

1. WebSphere Commerce を停止します。WebSphere Commerce の停止の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、47 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。

3. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
4. *host_name* → 「商取引 (Commerce)」 → 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「コンポーネント」 → 「TransportAdapter」 を展開します。
ここで、*host_name* は WebSphere Commerce を実行しているマシンの短縮名で、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前です。
5. 「使用可能」 チェック・ボックスを選択します。
6. 「適用」 をクリックします。
7. WebSphere Commerce 構成マネージャーを終了します。
8. WebSphere Commerce を始動します。 WebSphere Commerce の始動の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』を参照してください。

ご使用の WebSphere MQ 構成のテスト

WebSphere MQ 構成をテストするには、以下のメッセージを *hostname.inbounds* メッセージ・キューに挿入します。

```
<?xml test message>
```

 Windows 上で WebSphere MQ によってメッセージを挿入するには、以下のようにします。

1. WebSphere MQ の資料の解説に従って、WebSphere MQ Explorer をオープンします。
2. *hostname.inbounds* を右クリックし、ポップアップ・メニューから 「テスト・メッセージの書き込み (Put Test Message)」 を選択します。
3. テスト・メッセージ・ウィンドウで、次のテキストを入力します。

```
<?xml test message>
```
4. 「OK」 をクリックします。

他のプラットフォーム上でメッセージをメッセージ・キューに挿入する手順については、WebSphere MQ の資料を参照してください。

次の事柄が生じるなら、WebSphere MQ は適切に構成されています。

- テスト・メッセージが、順次インバウンド・キュー (*hostname.inbounds*) からなくなる。
- エラー・メッセージが *hostname.outbound* キューに表示される。
- オリジナル・メッセージが *hostname.error* キューに表示される。

追加の WebSphere MQ 資料

WebSphere MQ タスクに関する情報は、以下の資料に記載されています。

 「WebSphere MQ for iSeries システム管理ガイド」

 「WebSphere MQ システム管理ガイド」

「*WebSphere MQ* システム管理ガイド」は、以下の Web サイトから入手することができます。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/library/manualsa/manuals/crosslatest.html>

「*WebSphere MQ for iSeries* システム管理ガイド」は、以下の Web サイトから入手することができます。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/library/manualsa/manuals/platspecific.html>

注: Web アドレスは、紙面の都合上 2 行に分けて書いてありますが、1 行内に入力してください。

第 4 部 ディレクトリー・サービスと WebSphere Commerce - Express

WebSphere Commerce - Express でディレクトリー・サーバーを使用するには、以下の各セクションの手順を実行します。

1. 31 ページの『第 3 章 WebSphere Commerce で使用するためのディレクトリー・サーバーの構成』
2. 35 ページの『第 4 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成』

第 3 章 WebSphere Commerce で使用するためのディレクトリー・サーバーの構成

以下の表は、さまざまなオペレーティング・システム上で、WebSphere Commerce がサポートするディレクトリー・サーバーを示しています。

ディレクトリー・サーバー	WebSphere Commerce が 実行するオペレーティング・ システム		
	Linux	400	Windows
IBM Directory Server バージョン 4.1.1	○		○
IBM Directory Server バージョン 5.1	○		○
IBM OS/400 Directory Services		○	

WebSphere Commerce と共に使用しているディレクトリー・サーバーに応じて、以下のいずれかのセクションの手順を実行してください。

- 『WebSphere Commerce で使用するための IBM Directory Server の構成』
- 32 ページの『WebSphere Commerce で使用するための IBM OS/400 Directory Services の構成』

WebSphere Commerce で使用するための IBM Directory Server の構成

WebSphere Commerce と共に稼働するように IBM Directory Server を構成するには、次のようにします。

- 以下のサフィックス識別名 (DN) をディレクトリーに追加します。

o=root organization

- ディレクトリー・サーバーを再始動します。

- 以下の組織相対識別名 (RDN) をディレクトリーに追加します。

o=root organization

この組織は親 DN を持つことはありません。

- 以下の組織 RDN を、o=root organization RDN の子としてディレクトリーに追加します。

o=default organization

これらのタスクを実行する手順については、ご使用のバージョンの IBM Directory Server の資料を参照してください。

WebSphere Commerce で使用するための IBM OS/400 Directory Services の構成

WebSphere Commerce と共に稼働するように IBM OS/400 Directory Services を構成するには、次のようにします。

1. IBM OS/400 Directory Services を実行する iSeries マシン上の IBM OS/400 Directory Services に接尾部を追加します。『IBM OS/400 Directory Services への接尾部の追加』を参照してください。
2. IBM OS/400 Directory Services を実行する iSeries マシン上のディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーを作成します。33 ページの『ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーの作成』を参照してください。

IBM OS/400 Directory Services への接尾部の追加

IBM OS/400 Directory Services に接尾部を追加するには、次のようにします。

1. iSeries コマンド行から次のようなコマンドを発行して、IBM OS/400 Directory Services が実行中であることを確認します。

```
WRKSBSJOB QSYSWRK
```

ジョブ QDIRSRV がユーザー・プロファイル QDIRSRV で実行中であれば、IBM OS/400 Directory Services は実行中です。
2. Windows マシンで、iSeries Navigator を始動します。それには、「スタート」→「プログラム」→「IBM iSeries Access for Windows」→「iSeries Navigator」を選択します。
3. ターゲットの iSeries マシンへの接続がまだなければ、接続を作成します。
4. 左側のパネルでターゲット・マシンを展開します。
5. 左側のパネルで「ネットワーク (Network)」→「サーバー (Servers)」を展開します。
6. 左側のパネルの「TCP/IP」をクリックします。
7. 右側のパネルの「ディレクトリー (Directory)」を右マウス・ボタンでクリックしてから、ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。
8. 「ディレクトリーのプロパティ (Directory Properties)」ウィンドウで、「データベース/接尾部 (Database/Suffixes)」タブをクリックします。
9. 「新規接尾部 (New suffix)」フィールドで o=root organization を指定します。
10. 「追加」をクリックします。
11. 「OK」ボタンをクリックします。IBM OS/400 Directory Services を即時または後刻のどちらに再始動するかをたずねられます。後からの IBM OS/400 Directory Services の再始動を選択することもできますが、先に進むには IBM OS/400 Directory Services を再始動する必要があります。

後で IBM OS/400 Directory Services を再始動するよう選択した場合、次のようにして IBM OS/400 Directory Services を再始動することができます。

1. Windows マシンで、iSeries Navigator を始動します。それには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM iSeries Access for Windows」 → 「iSeries Navigator」を選択します。
2. ターゲットの iSeries マシンへの接続がまだなければ、接続を作成します。
3. 左側のパネルでターゲット・マシンを展開します。
4. 左側のパネルで「ネットワーク (Network)」 → 「サーバー (Servers)」を展開します。
5. 左側のパネルの「TCP/IP」をクリックします。
6. 右側のパネルの「ディレクトリー (Directory)」を右マウス・ボタンでクリックしてから、ポップアップ・メニューで「停止」を選択します。
7. 右側のパネルの「ディレクトリー (Directory)」を右マウス・ボタンでクリックしてから、ポップアップ・メニューで「スタート」を選択します。

ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーの作成

ディレクトリー・サーバー用のブートストラップ・エントリーを作成するには、IBM OS/400 Directory Services を実行するサーバーで次のようにします。

1. Directory Management Tool を始動します。
 - a. OS/400 システム上で、iSeries コマンド行に次のコマンドを入力して、IBM OS/400 Directory Services を始動します。
`STRTCPSVR *DIRSRV`
 - b. Windows マシンでは、次のようにします。
 - 1) 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM Directory 4.1」 → 「ディレクトリー管理ツール (Directory Management Tool)」を選択して、IBM Directory Server Directory Management Tool を始動します。
 - 2) 「サーバーの追加 (Add Server)」をクリックしてから、IBM OS/400 Directory Services を実行している iSeries マシンのホスト名を指定します。
 - 3) 認証タイプとして「シンプル」を選択します。
 - 4) ユーザー DN (たとえば、cn=Administrator) とパスワードを入力します。
 - 5) 「OK」をクリックします。
2. 「サーバーの追加 (Add Server)」をクリックします。
3. ユーザー DN とパスワードを該当するフィールドに入力します。「OK」をクリックします。

注: 「There is no data for o=root organization. (o=root organization のデータがありません)」と知らせるエラーが出されることがあります。このエラーは無視しても安全です。「OK」をクリックして、次へ進んでください。

4. `ldap://hostname:389` を選択し、「追加」ボタンをクリックします。
 この *hostname* は、IBM OS/400 Directory Services を実行している iSeries マシンの完全修飾ドメイン名です。

- 「エントリー・タイプ (Entry Type)」フィールドで、「組織 (Organization)」を選択します。
 - 「エントリー RDN (Entry RDN)」フィールドに、o=root organization を入力します。
 - 「OK」をクリックしてから「追加」をクリックして、変更を追加します。
5. o=root organization を選択して、「追加」ボタンをクリックします。
- 「エントリー・タイプ (Entry Type)」フィールドで、「組織 (Organization)」を選択します。
 - 「親 DN (ParentDN)」フィールドに o=root organization と入力します。
 - 「エントリー RDN (Entry RDN)」フィールドに、o=default organization と入力します。
 - 「OK」をクリックしてから「追加」をクリックして、変更を追加します。

ディレクトリー・ツリーは最新表示され、追加した変更内容が表示されます。ディレクトリー・ツリーが最新表示にならない場合、「ディレクトリー・ツリー (Directory Tree)」 → 「ツリーの最新表示 (Refresh Tree)」を選択して、更新済みの変更内容を表示します。

次のステップ

この章の解説どおりに処理した後で、35 ページの『第 4 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成』の解説を参考に、LDAP 用に WebSphere Commerce を構成します。

第 4 章 LDAP 用の WebSphere Commerce の構成

LDAP 用の WebSphere Commerce の構成は、次の 3 つのステップに分かれたプロセスです。

1. 『WebSphere Commerce 構成マネージャーにおける LDAP の使用可能化』
2. 36 ページの『WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの使用可能化』
3. 36 ページの『LDAP での WebSphere Commerce Payments の使用可能化』

WebSphere Commerce 構成マネージャーにおける LDAP の使用可能化

WebSphere Commerce 構成マネージャー内で LDAP を使用可能にするには、WebSphere Commerce を実行しているサーバー上で次のようにします。

1. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、47 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
2. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ご自分のホスト名 (*your host name*)」 → 「**商取引 (Commerce)**」を展開します。
4. 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」を展開します。
5. 「メンバー・サブシステム (**Member Subsystem**)」を選択して、以下のようになります。
 - a. 「認証モード」フィールドで、「LDAP」を選択します。
 - b. LDAP タイプが **IBM Directory Server** であることを確認します。
 - c. 「ホスト」フィールドに、LDAP サーバー・マシンの *host_name* を入力します。
 - d. ポート番号が正しいことを確認します。IBM Directory Server が使用するデフォルト・ポート番号は 389 です。
 - e. 「管理者識別名」フィールドに管理者の識別名を入力します。この識別名は、LDAP サーバーで使用されている名前と一致していなければなりません (たとえば、*cn=root* や *cn=Administrator* など)。
 - f. 「管理者のパスワード」フィールドに、管理者のパスワードを入力します (たとえば、*root*)。「確認パスワード」フィールドで、パスワードを確認する必要があります。
 - g. 「適用」をクリックします。
 - h. 「メンバー・サブシステムが **WebSphere Commerce** 用に正常に構成されました (**Successfully configured member subsystem for WebSphere Commerce**)」というウィンドウが表示されます。「OK」をクリックして、次へ進んでください。
6. 構成マネージャーを終了します。

WebSphere Commerce でのユーザー・マイグレーションの使用可能化

ユーザー・マイグレーションを使用可能にすると、現在 WebSphere Commerce データベースにプロファイルを有するユーザーは LDAP サーバーにマイグレーションすることができます。

WebSphere Commerce においてユーザー・マイグレーションを使用可能にするには、WebSphere Commerce を実行しているサーバーで次のようにします。

1. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を停止させます。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 51 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。
2. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
> 400 WC_userdir/instances/  
      instance_name/xml/instance_name.xml  
  
> Linux WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml  
  
> Windows WC_installdir\instances\instance_name\xml\instance_name.xml
```

WC_installdir および WC_userdir のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』から入手することができます。

3. MigrateUsersFromWCSdb エントリーが "ON" に設定されていることを確認してください。この行は次のようになっているはずです。

```
MigrateUsersFromWCSdb="ON"
```

4. ファイルを保管します。
5. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を始動します。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の始動の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 51 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。

次回に何らかの WebSphere Commerce 管理ページ (たとえば、ストア・サービスや管理コンソールなど) にログインするときに、ユーザーのプロファイルが LDAP サーバーにマイグレーションされます。

LDAP での WebSphere Commerce Payments の使用可能化

LDAP を使用してユーザーの認証を行うときに、WebSphere Commerce Payments での支払い処理を行えるようにするには、ユーザー・マイグレーションを使用可能にしてから、以下のようにならなければなりません。

1. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を始動します (まだ始動していない場合)。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の始動の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 51 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。

2. サイト管理者 ID を使用して、WebSphere Commerce 管理コンソールにログオンします。

サイト管理者 ID は WebSphere Commerce インスタンスの作成時に作成されたものです。

このステップでは、サイト管理者 ID を LDAP にマイグレーションします。

3. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を停止させます。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の停止の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 51 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。
4. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
➤ 400 WC_userdir/instances/  
instance_name/xml/instance_name.xml
```

```
➤ Linux WC_installdir/instances/instance_name/xml/instance_name.xml
```

```
➤ Windows WC_installdir%instances%instance_name$xml%instance_name.xml
```

`WC_installdir` および `WC_userdir` のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』から入手することができます。

5. 次のようなテキストを探します。

```
PAdminId="Site_Admin_ID"
```

この `Site_Admin_ID` がサイト管理者 ID です。

6. テキストを次のように変更します。

```
PAdminId="uid=Site_Admin_ID,o=root organization"
```

7. ファイルを保管します。

8. WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments を始動します。WebSphere Commerce および WebSphere Commerce Payments の始動の詳細は、51 ページの『WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止』および 51 ページの『WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止』を参照してください。

LDAP を使用しながら WebSphere Commerce Payments を使用可能にした後で、WebSphere Commerce Payments コンソールへのログオン時に、サイト管理者の完全識別名を指定する必要があります。WebSphere Commerce Payments コンソールは、サイト管理者の短縮名を使用したログオンは許可しません。

WebSphere Commerce での LDAP のテスト

WebSphere Commerce で LDAP が正しく稼働することを確認するには、次のようなテストを実行します。

- LDAP サーバー上でルート組織の新規のユーザーを作成してから、その新しいユーザーを使って WebSphere Commerce アクセラレーターにログインします。ログインが正常に完了すれば、WebSphere Commerce は正しく LDAP サーバーを使ってユーザーを検証していることとなります。

- WebSphere Commerce ストア内で新規ユーザーを作成します。 WebSphere Commerce ストア内で作成したユーザーが、LDAP サーバー上のユーザーとして表示されることを確認します。

第 5 章 WebSphere Commerce で LDAP を使用不可にする

注意

LDAP を使用不可にすると、以下のことが生じます。

- WebSphere Commerce で LDAP が使用可能になってから作成されたユーザーは、自分のパスワードが WebSphere Commerce データベース内に存在しないので、WebSphere Commerce への認証を行えなくなります。
- WebSphere Commerce で LDAP が使用可能になってから自分のパスワードを変更したユーザーは、LDAP が使用可能になる前に持っていたパスワードによる、WebSphere Commerce へのアクセスしか行えません。現在の (LDAP) パスワードは WebSphere Commerce では機能しなくなります。

WebSphere Commerce において Lightweight Directory Access Protocol を使用不可にするには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動します。 WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動に関する詳細は、47 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
2. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ご自分のホスト名 (*your host name*)」 → 「**商取引 (Commerce)**」を展開します。
4. 「インスタンス・リスト」 → *instance_name* → 「インスタンス・プロパティ」を展開します。
5. 「メンバー・サブシステム (**Member Subsystem**)」を選択して、以下のようになります。
 - a. 「認証モード」フィールドで、「データベース」を選択します。
 - b. 「適用」をクリックします。
 - c. 「メンバー・サブシステムが **WebSphere Commerce** 用に正常に構成されました (**Successfully configured member subsystem for WebSphere Commerce**)」というウィンドウが表示されます。「OK」をクリックして、次へ進んでください。
6. 構成マネージャーを終了します。

第 5 部 追加の WebSphere Application Server コンポーネント

WebSphere Commerce - Express では、WebSphere Commerce - Express および WebSphere Commerce Payments をインストールすると、WebSphere Application Server 基本製品がインストールされます。追加の WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Commerce に付属しています。

- 43 ページの『第 6 章 WebSphere Studio Application Server Toolkit』

第 6 章 WebSphere Studio Application Server Toolkit

WebSphere Studio Application Server Toolkit は、4 つのコンポーネント (Debug コンポーネント、Trace コンポーネント、 WebSphere Log Analyzer、および Eclipse ワークベンチ) から成り立っています。

Application Server Toolkit に関する詳細は、以下の WebSphere Application Server InfoCenter を参照してください。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>

WebSphere Commerce 症状データベース

Application Server Toolkit で使用可能な WebSphere Log Analyzer ツールを、WebSphere Commerce ログ・ファイルで効果的に使用するために、症状データベースを Application Server Toolkit にインポートして、WebSphere Commerce 症状データベースをロギング・ツールで使用できるようにしなければなりません。

WebSphere Commerce 症状データベースは、以下の URL で入手できます。

```
ftp://ftp.software.ibm.com/software/websphere/info/tools/  
logalyzer/symptoms/wc/symptomdb.xml
```

この URL が複数の行で示されているのは、単に見やすくするためです。URL は 1 行で入力してください。

Application Server Toolkit の WebSphere Log Analyzer への、WebSphere Commerce 症状データベースのインポートに関する詳細は、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

第 6 部 追加ソフトウェア・タスク

第 6 部の解説では、本書に記載されている追加ソフトウェア・コンポーネントのインストールおよび構成時に実行する必要がある共通タスクまたはオペレーティング・システム別のタスクについて述べています。

第 7 章 WebSphere Commerce のタスク

ここでは、WebSphere Commerce に付属している追加ソフトウェアのインストールおよび構成時に完了する必要がある WebSphere Commerce タスクに関して、各オペレーティング・システムごとに解説しています。

WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

Linux での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

WebSphere Commerce 構成マネージャーを始動するには、以下のようにします。

1. WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非 root ユーザー ID でログインします。
2. 作成または変更するインスタンスに応じて、WebSphere Commerce ノードまたは WebSphere Commerce Payments ノードで以下のようにして、サーバーを始動します。
 - a. 端末ウィンドウをオープンします。
 - b. 次のようなコマンドを発行します。

```
cd WC_installdir/bin
./config_server.sh
```

WC_installdir のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

注:

- 1) `config_server.sh` コマンドを入力した端末ウィンドウをクローズしないでください。クローズすると、構成マネージャーは停止してしまいます。
- 2) バックグラウンド・プロセスとして構成マネージャー・サーバーを実行しないでください。これは、セキュリティ上のリスクにつながります。
- 3) これで、構成マネージャーがポート 1099 で接続を listen するようになりました。構成マネージャーに別のポートで listen させる場合、`./config_server.sh` コマンドの代わりに、以下のコマンドを発行します。

```
./config_server.sh -port port_number
```

この *port_number* は、構成マネージャーが接続を listen するポートです。

3. 以下のいずれかを行って、クライアントを始動します。
 - ローカル・マシンで WebSphere Commerce 構成マネージャーを実行する場合、次のようにします。
 - a. 別の端末ウィンドウをオープンします。
 - b. WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非 root ユーザー ID で、以下のコマンドを発行します。

```
export DISPLAY=host_name:0.0
cd WC_installdir/bin
./config_client.sh [-port cm_port]
```

ここで、変数は以下のように定義されます。

hostname

構成マネージャーへのアクセスに使用する予定のマシンの完全修飾ホスト名。

cm_port

構成マネージャー・サーバーの始動時に指定されるポート。

-port パラメーターはオプションです。 -port パラメーターを指定しない場合、構成マネージャー・クライアントがポート 1099 を使用して構成マネージャー・サーバーへの接続を試行します。

注: X クライアントが、 xhost コマンドを使用して X サーバーへのアクセスを許可される必要があるとします。 X クライアントに許可を与えるには、 root としてシステム・コンソールから以下のコマンドを発行します。

```
xhost +host_name
```

この *host_name* は、インストール・ウィザードの実行元のマシンの完全修飾ホスト名です。

- c. 構成マネージャーにログインします。初期 ID は **webadmin**、初期パスワードは **webibm** です。初めて構成マネージャーにログインする場合、パスワードを変更するかどうか尋ねられます。
- リモート・マシンで WebSphere Commerce 構成マネージャー・クライアントを実行する場合、以下を行います。
 - a. WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非 root ユーザー ID で、リモート・マシンにログオンします。
 - b. 端末ウィンドウをオープンします。
 - c. 次のようなコマンドを発行します。

```
export DISPLAY=host_name:0.0
cd WC_installdir/bin
./config_client.sh -hostname cm_hostname [-port cm_port]
```

ここで、変数は以下のように定義されます。

hostname

構成マネージャーへのアクセスに使用する予定のマシンの完全修飾ホスト名。

cm_hostname

構成マネージャー・サーバー・マシンの完全修飾ホスト名。

cm_port

構成マネージャー・サーバーの始動時に指定されるポート。

-port パラメーターはオプションです。 -port パラメーターを指定しない場合、構成マネージャー・クライアントがポート 1099 を使用して構成マネージャー・サーバーへの接続を試行します。

`WC_installdir` のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

注: X クライアントが、`xhost` コマンドを使用して X サーバーへのアクセスを許可される必要があるとします。X クライアントに許可を与えるには、`root` としてシステム・コンソールから以下のコマンドを発行します。

```
xhost +host_name
```

この `host_name` は、インストール・ウィザードの実行元のマシンの完全修飾ホスト名です。

- d. 構成マネージャーにログインします。初期 ID は **webadmin**、初期パスワードは **webibm** です。初めて構成マネージャーにログインする場合、パスワードを変更するかどうか尋ねられます。

OS/400 での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

OS/400 で WebSphere Commerce 構成マネージャーを始動するには、次のようになります。

1. 次のようして、構成マネージャー・サーバーを始動します。
 - a. プロファイルに *SECOFR ユーザー・クラスがあり、なおかつ英語または各自のインスタンスのデフォルト言語として選択した言語の、固有設定でセットアップされていることを確認してから、iSeries システムにログオンします。
 - b. 次のようなコマンドを入力して QShell セッションを始動します。

```
STRQSH
```

さらに、QShell セッションで次のようにします。

- 1) 以下のコマンドを発行して WebSphere Commerce サーバー bin ディレクトリーに切り替えます。

```
cd WC_installdir/bin
```

`WC_installdir` のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

- 2) 以下のコマンドを発行して、構成マネージャー・サーバー・プログラムを開始します。

```
config_server.sh [-port server_port_number]
```

`-port` パラメーターはオプションです。このパラメーターを指定しないと、デフォルト・パラメーターである 1099 が使用されます。構成マネージャー・サーバーは、このポート番号を使用して `listen` します。

`server_port_number` を指定する場合、1024 ~ 65535 の間で、なおかつ iSeries システムで現在使用されていない値にしなければなりません。

注: インスタンスの作成で使用する言語と同じでない 1 次言語をもつシステムを使用する場合、`QSYSlanguage_feature_number` ライブラリーをユーザー・プロファイルのライブラリー・リストに追加する必要があります。

す。そうしない場合、プロファイルは QSYS の下でそのライブラリーを見つけ出そうとします。言語機能ライブラリーを追加するには、EDTLIBL コマンドを使用します。

構成マネージャーをはじめてシステムで実行すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/ConfigManager.JAR.  
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommercePayments/V55/wc.mpf.ear/lib/ibmjssc.JAR1  
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/Utilities.JAR.  
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/Enablement-BaseComponentsLogic.JAR.  
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/jtopen.JAR.  
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/xerces.JAR.  
Attaching Java program to /QIBM/ProdData/CommerceServer55/lib/sslite.ZIP.
```

¹ この行は、WebSphere Commerce Payments が WebSphere Commerce と同じノードにインストールされる場合にのみ表示されます。

次のようなメッセージが通知されたら、次のステップに進みます。

```
Registry created.  
CMServer bound in registry.
```

2. 構成マネージャー・クライアントをインストールした Windows マシンで、構成マネージャー・クライアントを始動します。
 - a. 構成マネージャー・クライアント・マシンでコマンド・プロンプトを使って、`cfgmgr_installdir/bin` ディレクトリーに移動します。
 - b. 次のようなコマンドを実行して、構成マネージャー・クライアントを始動します。

```
configClient.bat -hostname iSeries_Host_name [-port server_port_number]
```

詳細は次のとおりです。

iSeries_Host_name

構成マネージャー・サーバーが実行されている iSeries サーバーの完全修飾ホスト名です。

server_port_number

構成マネージャーが listen している iSeries サーバーのポート番号です。このパラメーターは、1099 以外のポート上の構成マネージャー・サーバーに接続する場合にのみ必要です。

- c. 構成マネージャーにログインします。初期 ID は **webadmin**、初期パスワードは **webibm** です。初めて構成マネージャーにログインする場合、パスワードを変更するかどうか尋ねられます。

Windows での WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動

Windows で WebSphere Commerce 構成マネージャーを起動するには、次のようにします。

1. IBM WC 構成マネージャーが実行中であることを確認します。それには、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択して、IBM WC 構成マネージャー・サービスが「開始」の状況になっているかどうかを調べます。

重要

IBM WC 構成マネージャー・サーバーのサービスを実行中のままにすると、セキュリティ上の問題を生じる可能性があります。構成マネージャーを使用しないときは、WC 構成マネージャー・サーバー・サービスを停止してください。

セキュリティ上の問題が起きないようにするには、IBM WC 構成マネージャーを自動ではなく手動で始動するように設定してください。

2. 「開始」→「IBM WebSphere Commerce」→「構成」を選択します。

WebSphere Commerce インスタンスの始動または停止

WebSphere Commerce インスタンスを始動または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが始動済みであることを確認します。
2. Web サーバーが始動済みであることを確認します。
3. 始動する WebSphere Commerce インスタンスで、アプリケーション・サーバーの始動、停止、または再始動を行います。アプリケーション・サーバーの始動および停止に関する説明は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

WebSphere Commerce Payments インスタンスの始動または停止

WebSphere Commerce Payments インスタンスを始動または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが始動済みであることを確認します。
2. Web サーバーが始動済みであることを確認します。
3. 構成マネージャーを始動します。構成マネージャーの始動に関する詳細は、47 ページの『WebSphere Commerce 構成マネージャーの起動』を参照してください。
4. **WebSphere Commerce** の構成マネージャーで、「hostname」→「Payments」→「インスタンス・リスト」の順に拡張表示します。
5. 始動または停止する WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前を右クリックし、以下のいずれかを行います。
 - WebSphere Commerce Payments インスタンスを始動するには、ポップアップ・メニューから「Payments インスタンスの開始」を選択します。「インスタンスが正常に始動されました (Instance started successfully)」ダイアログが表示されてから、「OK」をクリックして、ダイアログを消します。
 - WebSphere Commerce Payments インスタンスを停止するには、ポップアップ・メニューから「Payments インスタンスの停止」を選択します。

第 8 章 WebSphere Application Server のタスク

このセクションでは、WebSphere Commerce をインストールおよび管理する際に完了する必要のある、WebSphere Application Server タスクについて説明します。

アプリケーション・サーバーの始動および停止

アプリケーション・サーバーの始動または停止に関する説明は、ご使用のオペレーティング・システムによって異なります。

Linux でのアプリケーション・サーバーの始動または停止

アプリケーション・サーバーを始動または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが始動済みであることを確認します。
2. 端末ウィンドウに次のようなコマンドを入力します。

```
su - non_root_user
cd WAS_installdir/bin
non_root_user
```

WebSphere Commerce をインストールする前に作成した非 root ユーザー ID。

WAS_installdir

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール・ディレクトリー。 WAS_installdir のデフォルト値は、iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

3. 以下のいずれかを行います。
 - アプリケーション・サーバーを始動する場合、次のコマンドを入力します。
`./startServer.sh application_server_name`
 - アプリケーション・サーバーを停止する場合、次のコマンドを入力します。
`./stopServer.sh application_server_name`

詳細は次のとおりです。

application_server_name

始動するアプリケーション・サーバーの名前。いくつかの共通アプリケーション・サーバー。

アプリケーション・サーバー名	説明
server1	デフォルトの WebSphere Application Server。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するには、このサーバーを実行していなければなりません。

アプリケーション・サーバー名	説明
<i>WC_commerce_instance_name</i>	WebSphere Commerce アプリケーション・サーバー
<i>payments_instance_name_Commerce_Payments_Server</i>	WebSphere Commerce Payments アプリケーション・サーバー

ここで、 *commerce_instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前、 *payments_instance_name* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。

OS/400 でのアプリケーション・サーバーの始動および停止

OS/400 でアプリケーション・サーバーを始動または停止するには、次のようにします。

1. 次のようにして、WebSphere Application Server サブシステムの始動を確認します。

- a. OS/400 コマンド・セッションを始動します。
- b. 以下のコマンドを発行します。

```
WRKSBS
```

- c. 表示されている実行中のサブシステムのリストで、以下のサブシステムが示されているか確認します。

```
QEJBAS5
```

実行中のサブシステムのリストで QEJBAS5 サブシステムが示されていない場合、アプリケーション・サーバーを始動する前に、そのサブシステムを始動しなければなりません。サブシステムの始動に関する詳細は、56 ページの『OS/400 WebSphere Application Server サブシステムの始動』を参照してください。

2. OS/400 コマンド行で以下を入力して、QShell セッションを始動します。

```
QSH
```

3. 以下のいずれかを行います。

- アプリケーション・サーバーを始動する場合、次のコマンドを発行します。

```
WAS_installdir/bin/startServer
-instance WAS_instance_name application_server_name
```

- アプリケーション・サーバーを停止する場合、次のコマンドを発行します。

```
WAS_installdir/bin/stopServer
-instance WAS_instance_name application_server_name
```

WAS_instance_name

アプリケーション・サーバーを始動する、WebSphere Application Server インスタンスの名前。デフォルトの WebSphere Application Server インスタンスは *default* です。

デフォルトの WebSphere Application Server インスタンスで、アプリケーション・サーバーを始動する場合、*-instance server_name* パラメーターはそのコマンドのオプションです。たとえば、以下のコマンドを発行します。

/QIBM/ProdData/WebAS5/Base/bin/startServer *application_server_name*

application_server_name

始動するアプリケーション・サーバーの名前。いくつかの共通アプリケーション・サーバー。

アプリケーション・サーバー名	説明
server1	デフォルトの WebSphere Application Server。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するには、このサーバーを実行していなければなりません。
<i>WC_commerce_instance_name</i>	WebSphere Commerce アプリケーション・サーバー
<i>payments_instance_name</i> _Commerce_Payments_Server	WebSphere Commerce Payments アプリケーション・サーバー

ここで、 *commerce_instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前、 *payments_instance_name* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。

Windows でのアプリケーション・サーバーの始動および停止

Windows でアプリケーション・サーバーを始動または停止するには、次のようになります。

1. 管理者権限をもった Windows ユーザー ID でログオンします。
2. コマンド・プロンプト・セッションを始動します。
3. 以下のコマンドを発行します。

```
cd WAS_installdir%bin
```

この *WAS_installdir* は、 WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール・ディレクトリーです。 *WAS_installdir* のデフォルト値は、 iv ページの『パス変数』に一覧で示されています。

4. 以下のいずれかを行います。
 - アプリケーション・サーバーを始動する場合、次のコマンドを入力します。
`startServer application_server_name`
 - アプリケーション・サーバーを停止する場合、次のコマンドを入力します。
`stopServer application_server_name`

詳細は次のとおりです。

application_server_name

始動するアプリケーション・サーバーの名前。いくつかの共通アプリケーション・サーバー。

アプリケーション・サーバー名	説明
server1	デフォルトの WebSphere Application Server。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するには、このサーバーを実行していなければなりません。
<i>WC_commerce_instance_name</i>	WebSphere Commerce アプリケーション・サーバー
<i>payments_instance_name</i> _Commerce_Payments_Server	WebSphere Commerce Payments アプリケーション・サーバー

ここで、 *commerce_instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前、 *payments_instance_name* は WebSphere Commerce Payments インスタンスの名前です。

WebSphere Application Server 管理コンソールの始動

デフォルトの WebSphere Application Server (server1) を始動してから、WebSphere Application Server 管理コンソールを始動できます。詳細は、53 ページの『アプリケーション・サーバーの始動および停止』を参照してください。

Web ブラウザーをオープンして以下の URL を入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

`http://hostname:port/admin`

または

`https://hostname:port/admin`

ただし *hostname* は、WebSphere Application Server を実行しているマシンの完全修飾の TCP/IP 名、 *port* は、WebSphere Application Server 管理コンソールの TCP/IP ポートです。

WebSphere Application Server 管理コンソールのデフォルト・ポートは、URL で指定されているプロトコルによって異なります。HTTP の場合、デフォルト・ポートは 9090 です。HTTPS の場合、デフォルト・ポートは 9043 です。

OS/400 WebSphere Application Server サブシステムの始動

使用するユーザー・プロファイルには、WebSphere Application Server サブシステムを始動するために *JOBCTL 権限が必要です。

iSeries で WebSphere Application Server サブシステムを始動するには、次のようにします。

1. TCP/IP を始動します。OS/400 コマンド行で次のようなコマンドを発行します。

STRTCP

2. OS/400 コマンド行で次のようなコマンドを実行して、QEJBAS5 サブシステムを始動します。

STRSBS SBSD(QEJBAS5/QEJBAS5)

デフォルトの WebSphere Application Server インスタンスが自動的に始動します。デフォルト・アプリケーション・サーバー・インスタンスは *server1* です。

第 7 部 付録

付録. 詳細情報の入手方法

WebSphere Commerce システムとそのコンポーネントに関するさらに詳しい情報は、さまざまな形式でさまざまな情報源から入手できます。ここでは、利用できる情報と利用方法を示します。

WebSphere Commerce の情報

WebSphere Commerce の情報源は、以下のとおりです。

- WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ
- WebSphere Commerce Technical Library

WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ

WebSphere Commerce のオンライン情報は、WebSphere Commerce のカスタマイズ、管理、および再構成に関する主要な情報源です。WebSphere Commerce をインストールしたら、以下の URL を入力することによってオンライン情報のトピックにアクセスできます。

`https://host_name:8000/wchelp/`

この `host_name` は、WebSphere Commerce のインストール先マシンの完全修飾ホスト名です。

WebSphere Commerce Technical Library

WebSphere Commerce Technical Library は、以下の URL で利用できます。

`http://www.ibm.com/software/commerce/library/`

このマニュアルのコピー、およびこのマニュアルの更新されたバージョンは、WebSphere Commerce Web サイトの Library のセクションから PDF ファイルの形式で入手できます。さらに、この Web サイトから、新規および更新された文書を入手することができます。

WebSphere Application Server

WebSphere Application Server に関する情報は、以下の WebSphere Application Server の InfoCenter から入手できます。

`http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html`

WebSphere Application Server Network Deployment

WebSphere Application Server Network Deployment に関する情報は、以下の WebSphere Application Server の InfoCenter から入手できます。

`http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html`

WebSphere Application Server Edge Component

WebSphere Application Server Edge Component に関する情報は、以下の WebSphere Application Server の InfoCenter から入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>

その他の IBM 資料

ほとんどの IBM 資料は IBM 認定販売業者あるいは営業担当員から購入することができます。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む。) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。

国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*IBM Canada Ltd.
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
Canada*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

商標

IBM ロゴ および以下は、IBM Corporation の商標です。

DataPropagator	DB2	DB2 Universal Database
@server	IBM	iSeries
MQSeries	OS/400	WebSphere

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。